

アートプロジェクト「^{いざな}夢想する園—Rose Gardenへの誘い—」

—産・学・官・民連携がもたらす意識変容—

谷 悟

はじめに

2004年12月19日から26日まで、中之島公園バラ園において『夢想する園—Rose Gardenへの^{いざな}誘い—』と題したアートプロジェクトを展開した。本企画は、OSAKA光のルネサンス実行委員会⁽¹⁾が主催する「OSAKA光のルネサンス2004/ローズライトガーデンプロジェクト⁽²⁾（以下、光のルネサンス）」の一環として催されたものである。

私が総合ディレクターを務め、グランドテーマの設定、及び、各作品のコア・プランを練り上げるとともに、プロジェクト編成（キャスティング）、プロジェクトルームの環境整備、関係諸機関との打ち合わせ、予算の確保、広報などアートマネジメントに関する業務も担当した。なお、作品制作と運営・進行については本学6学科より集結した20名の学生が「大阪芸術大学中之島バラ園アートプロジェクトコミッティ」のスタッフとしてプロジェクトに携わり、15名の学生が協力者としてサポートするかたちをとった⁽³⁾。受け身での参加ではなく、各々がよりリアルなあり方をさぐり、アレンジを加える^{コラボレーティブ}協働的な取組みとなった。大学本部より私に依頼があったのが開催の2ヶ月弱前ということに加え、前年度に対して2004年度はエリアを格段に拡大して着手するとの主催者側の意向は、かなり厳しい状況を生じさせたが、少数精鋭で一丸となって取組み、全過程を超高速で進めることで、なんとか完結させることができた。

本稿では、実施概要を報告するとともに、この実践を通じて導き出されたアートプロジェクトの可能性についての見解を示すものとする。

1. 基本コンセプト

中之島公園は、大阪市北区に位置する風致公園であり、都心のオアシスとして人々を憩わせる場である。しかし、光のルネサンス開催中においては、大阪市役所～中央公会堂のイルミネーションを目的に来場する人々が多く、奥のバラ園までなかなか足を運んでもらえないという昨年までの実情を考慮し、会期中・会期後を問わず、より多くの人たちを「バラ園へ^{いざな}誘う」ことを念頭に、以下の5つのコンセプトのもと、作品を構成した。

a. 大阪芸術大学らしいポーズ

—プロジェクト編成による横断的なクリエイション—
本学のチームが参加する際、最も意識したことは「大阪芸術大学らしいポーズをとる」という点である。美術、デザイン、写真、環境デザイン、舞台芸術、芸術計画学科の学生たちが日々学んでいる専門性を生かせるようなチーム構成にすることで始めて可能となる横断的なクリエイションを模索する。また、単なる「賑やかさ」や「美しさ」を強調するイベント的なライティングに力を尽くすのではなく、「光」や「照明」を用いた新しい可能性にしっかりと挑むことで、バラへの思索を促す時空間の創出を目指す。

b. サイトスペシフィック・アート×五感

—この場所でなければ成立しない表現—
中之島バラ園でしか成立しないアート表現にこだわることをなによりも大切にする。造形、音響、映像、言語などの多様なメディアを用いつつ、ローズ・ショ

ップ&ガーデン・カフェ等の仕掛けを駆使してバラの魅力に迫り、観客の五感（視・聴・触・臭・味）を揺さぶる。また、公園におけるフィールドワークの成果をリーフレットに掲載（図1）するなど、この場所のリアリティを浮上させる表現を基軸とし、制作に取り組む。

c. 広域なエリアをアートで連結

—バラ園巡見システムの確立—

今年度最大のポイントは「ここに作品を展示する」という1点集約型ではなく、大阪市東洋陶磁美術館前からバラ園に至る広大なエリアに、いくつもの作品をちりばめるかたちでの参加を依頼された点にある。それはいわば、点ではなく「線、更には面としての展開手法」を問われたと言いかえることができよう。よって、エントランス・ゲート、ローズ・ギャラリー、ローズ・ドーム、ローズ・カーニバル、ローズ・ブリッジ、ローズ・シアターという「流れ」をつくり、中之島中心部からの導線、及びバラ園全体を巡見することができるプランを考案した。



図1 ダイアログマップ

d. 市民と共に創作するシステム

—増殖、進化をとげる作品—

自己完結させた作品をただ展示するだけでなく、ここを訪れる人々との関わりを大切に、共に創るシステムを築きたいと考えた。日々、増殖、変貌をとげる

作品は、我々の考えに興味を示し、1つのリアクションを残そうとしたエネルギーの結晶とは言えないだろうか。そこで交わされるコミュニケーションは、人々をゆるやかに繋ぎつつも、アートの深さに誘われるきっかけにもなるのではないかと。

e. 冬に夢想するバラの真意

—美しく咲きほこる季節の集客をも希求する—

クリスマス前後の期間にイルミネーションで市民を集め、愉しんでもらうことも「大阪の活力」になり得ると思われるが、我々は薔薇が夢見するその姿にライトアップを施したい。ほとんどの花が落ちたあとの寂しいバラ園で、薔薇は寒さを耐え忍んでいるだけではなく、美しく咲きほこる自分の姿をただひたすら夢想しているというニュアンスから、冬の庭を「夢想する園」と捉え、タイトルに象徴化させた。薔薇の真意を考えた時、数多くのバラの花と香りで満たされる春や秋に再び来園してくれることを密かに待ち望んでいるのではないだろうか。それは市民のゆとりと豊かな感性の萌芽につながるものと確信する。

2. 作品概要

会場を6つの表現空間で繋ぐように構成し、来場者がアートによる仕掛けを次々に体感することで、薔薇への想いを徐々に募らせていけるようにした。

以下にエリアごとの空間構成内容とそのポイント、来場者の反応などを報告する。

a. エントランス・ゲート（東洋陶磁美術館前）写真1

大阪市東洋陶磁美術館前にある大きな木に照明をつくることは許可されなかったため、プランを変更せざるを得なかった。芸大の裏山から集めた枝を立体的に積み重ね、木を囲むように枠組みを作り、照明（ローズライト）を設置した。ローズライトは、バラ園からいただいたバラの花弁を乾燥させたものを貼り付け、

聴覚でバラをイメージすることを企てたこの作品は、サウンドスケープの手法により、繊細な音響空間を設計しようとしたものである。それは、薔薇が聴いているであろう音を想定し、バラ園にてサンプリングした音源により構成した音風景⁽⁵⁾を密やかに感じてもらうことをねらったのである。しかし、隣のエリアにおいては、一日中、コンサートが催されており、その巨大な音によってドーム内の繊細な音はかき消され、大きなダメージを受けてしまうという状況があった。このことを踏まえ、ヴォリュームの調整や掲示物を貼ることで来場者の関心を促すようにつとめ、少しでも耳を傾けてもらえるように工夫を凝らした。また、バラの香りを感じてもらうため、リネンウォーターを撒布した。

d. ローズ・カーニバル（バラの広場）

当初、このエリアにはバラソル型照明オブジェ（写真4）が4基並ぶ予定であったが、バラを傷つける可能性が出てきたため、公園事務所側から許可された3基のうち、導線を考慮した結果、2基のみに装飾を施すこととなった。

ローズ・カーニバルに設置したローズ・ショップ（写真5）において販売した花束は、薔薇と深く永く向き合うための仕掛けそのものを作品にしたものである。購入した日をバラ記念日に設定。年ごとの記念日に、薔薇と対峙し、発生した想いを絵や詩などの手法でワーク



写真4 照明オブジェ

シートに表現を残しておく。そして10年後（2014年）に再びこの園に集まって、ローズ・パーティーを催す。つまり、バラを夢想し続けた者たちの美しきコミュニティを形成しようという新たなプロジェクトを同時にスタートさせたのだ。それは、イベント特有の「一過性」とは異なる「持続すること」の大切さを強く打ち出したかったからである。2004年にコミッティと縁を結んだ来場者との再会は極めて楽しみであり、このメンバーで何かを企画するまでに発展させられればと考える。



写真5 ローズ・ショップ

e. ローズ・ブリッジ（ばら園橋）写真6

市民が作品の一端を担うという仕掛けを含めたこの作品は、ばら園橋の欄干にシルバーネットを張り、両側面からライトアップを施すことで橋全体が浮き立つよう工夫した。エントランス・ゲートで来場者に花卉型パーツを配布し、橋まで行ってパーツを取り付けてもらうよう呼びかけた。日ごとに増えるパーツによって橋は色づき、最終日にはローズ色の橋が出来上がった。配布したパーツは約3,000本。予想以上に評判がよく、会期中に追加制作したほどだった。ローズ・シアター直前の通過点でもあるため、イベント会場の喧騒から脱して、静寂な薔薇との対話空間へ向う来場者にとっては、適度なクッションとしての役割も果たしたと言える。また、この橋には通常、数個のプランターが備え付けられているが、公園事務所側の配慮により、会期中は別の場所へ移動していただくことができた。



写真6 ローズ・ブリッジ



写真7 ローズ・シアター

f. ローズ・シアター（バラの庭）写真7

バラ園の最も奥に位置するバラの庭の中心部にトラスを組み、プロジェクターを用いてスクリーン（3m×2.7m）に映像を投影した。映像は、一輪のバラが蕾の状態から開花するまでの様子をインターバル撮影し、5分間に編集したものである。これは、春を待ちながら花開くことをただひたすらイメージしている冬の薔薇の夢見にライトアップを施し、「夢想する園」というタイトルを大いにシンボライズしようとしたものである。映像に使用したバラは、実際に中之島バラ園・バラの庭で咲いていたものを公園事務所のスタッフより提供していただいた。幾度かの失敗があった為、その度に現地へ出向いて協力をお願いしたのだが、快く対応していただき、温かい言葉までかけていただいたことは非常に心強かった。その後、開花させる為の条件（温度、湿度）を学習し、試行錯誤しながらなんとか開花するまでの様子をおさめることに成功した。「スピードを尊ぶ価値観の象徴とも言える高速道路の高架と秒単位で刻々と更新される株価を扱う大阪証券取引所の間は^{はざま}いのち間で生命の時間をきわだたせる」という周辺環境も取り込んだ巨大なインスタレーション表現により、バラと対峙する深遠な時空間をもたらすことができたと思う。

また、作品に真剣な眼差しを注いでいる来場者には、身体にまで薔薇を浸透させてもらおうと、ガーデン・



写真8 ガーデン・カフェ

カフェ（写真8）よりローズティーをふるまった。会期後半にはガーデン・カフェにおいてもバラを販売することとなり、この場所はコミュニケーションスペースとしての機能を一層強めた。プロジェクトの最終地点であるため、全体を体感し終えた来場者との対話が可能となり、プロジェクトに対する貴重な意見を収集することはもとより、薔薇に関する話題を通じて来場者との知識や想いの交換ができた。

3. 総括

今回のプロジェクトが、これに参加した者たちを大きく成長させたことは言うまでもないが、加えて、「大阪芸術大学らしいポーズ」を社会に対しアピールすることができた極めて有意義な取組みともなった。以下

に3つの「資源」というキーワードを用いて、「夢想する園」により、導かれた効果をまとめることとする。

a. 教育資源／総合芸術大学ならではのプログラム

—インターンシップによる実践力の養成—

本プロジェクトの企画趣旨に興味を示し、社会と直結したインターンシップ・プログラムに挑もうとした学生は6学科（協力メンバーも含めると7学科）から集まり、プロジェクトチームは結成された。普段の授業では対社会的にプロジェクトを実践することがほとんどなく、今回のように様々な社会的制約が課せられた取組みは、学生にとって極めてシビアなものとなった。それでも、学生たちは各々の個性と力を生かして、それと真剣に向き合い、社会と繋がってでしか得られない貴重な経験をしたと言える。異なる学科、専攻の学生たちが集うプロジェクトルームは現場感覚あふれるアトリエとなった。学生たちは、互いの芸術領域を意識し、理解を深めることで、協働作業のためのバランス感覚を養った。また、専門知識や技術を含めた意見交換を重ねることは「個々の才能をどのように生かすか」を模索することにもなり、本学の建学の精神に掲げられる「総合のための分化」を具現化させたトレーニング・メニューになり得たものと思われる。

今回の取組みはアートを社会に着地させるプロデュース・ワークでもあることから、様々な人々と交渉を進め、粘り強く合致点を探ることも体験してもらえた。現実的なレベルでは「アートならば何をやってもよい！」という傲慢な考え方は一切通用せず、「いかにアートをコミットさせれば社会を揺さぶることができるのか」をしっかりと考えなくてはならないことが理解できたであろう。

このように、プロセスをも重視するアートプロジェクトへの参加は、キャンパスにおける学生生活ではなかなかまともに考えられることがない「芸術とは何か」という命題を突きつけられる機会にもなったのではないかと。ともあれこの経験は、今後、彼（彼女）ら

が制作活動を展開させる上で、必ずや有益な教育資源となるであろう。

b. 経営資源／大阪芸術大学のブランド力をアップ

—産・学・官・民連携事業でソフト支援力を発揮—

「ローズライトガーデンプロジェクト」は、ラジオ大阪、大阪芸術大学、大阪市の産・学・官連携事業として進められたが、単なるイベントとは異なるアートとしてのポーズ（作品概要参照）を提示することで、大阪芸術大学の存在意義をしっかりとアピールすることができた。OSAKA光のルネサンス実行委員会を主管する大阪市をはじめ、それを構成する関西有力企業に対し、「財的支援と共に、ソフト供給の面からも大きな役割をしっかりと果たしていただいた」というお言葉を関係者よりいただけたことは幸いであった。

また、このプロジェクトの様子が、新聞、ラジオ、TV、Web等で報道⁶⁾されたことにより、パブリシティ効果は大となり、大阪芸術大学に対する「信頼」や「期待」が寄せられることになったであろう。

このように、本取組みは大阪芸術大学のブランド力をますます高めることとなり、（学）塚本学院の経営資源として少なからず機能したのではないかと考えられる。

c. 文化資源／高次な意識の芽生え

—バラ園のあり方を共に考える関係性の構築—

「夢想する園」の制作にあたり、「イベントに埋没せず、芸術表現として自律する」ことをポリシーに掲げ、バラにまったく触れなかった昨年とは逆に「薔薇三昧」のアプローチをとるなかで最も痛感したことは、バラ園は大阪のかけがえのない財産であり、その管理の全てを行政に任せるのではなく、市民が積極的にかかわろうとする姿勢とエネルギーこそが次代の大阪を築く上で大きな活力を生むということである。我々の先行投資をも含めたこの取組みにより、真の文化意識を市民に芽生えさせることができたことを確信する。

なお、このアートプロジェクトは企画運営側（送り

手)にも確かな意識変容をもたらした。それは盛大なイベントを企画して、この園を開こうとする大阪市ゆとりとみどり振興局文化集客部集客観光課と、日々バラの栽培を手掛け、保護、管理に力を注ぐ、同局公園事務所の間にあった意識のズレと葛藤を、純粹にバラに向き合おうとする学生たちの姿勢が、双方を揺さぶったという事実であった。もはや対立ではなく、両者が繋がり、それに市民が加わることで有効な関係性を構築し、これからのバラ園のあり方を共に考える大切さに気付いたことは、かなり高次元な文化資源を創出させたと言えるのではないか。

おわりに

今回のプロジェクトに着手する際、私が最も気をつけなくてはならないと思ったことは、《芸術》の名の下に、バラ園を侵略してはならない⁽⁷⁾というところであった。これは社会に着地するアートが傲慢なあり方に終止せず、かかわる人たちを自ずと相互触発⁽⁸⁾させる磁場になり得る可能性を最も大切にしたいと考えているからだ。

また、アートプロジェクトとは、はっきりとした解を導き出したり、完結させることのみを目標としたりするものではないため、即効力はないものの、根源的なレベルで対象に迫る深さを体感できることが大きな特徴と言える。ともすれば、この種のビックプロジェクトはただ催すだけでもそれなりの結果(収益、集客、イメージアップ、余暇メニュー)が得られ、毎年恒例の行事として徐々に形骸化される危険性がつきまとうものである。産・学・官・民が各々の特性に沿うままに役割分担し、あらかじめ設定された数字を個別に達成することだけに鎬を削るのではなく、真に連携することに挑むこそが大切ではなかろうか。我々の取組みはささやかなものではあったが、産・学・官・民を繋いだ上、それぞれに意識変容を促したという点において1つの役割を果たしたと言えるだろう。こ

の実践を通じ、公共的イベントに参画するアートプロジェクトがもたらす可能性について私自身が考えられたことは大変有益であったと思う。

最後になったが、本稿は大学本部に提出した報告書を再構成した上で補筆を施し、仕上げたものであることを付記しておく。なお、掲載した写真は全て、坂田貴広氏によるものであり、編集(アレンジ・校正を含む)については、本プロジェクトのコーディネーターを務めた水谷文香氏の手を煩わせた。心からの謝意を表す次第である。また、公共空間で繰り広げられる大規模な催しに参加するかたちでアートプロジェクトを実践する機会を我々に与えてくださった塚本邦彦理事長をはじめ、実現まで色々と力を貸してくださった工藤皇事務局長、及び、協力くださった大阪芸術大学の教職員、更には、共に力を合わせてプロジェクトを推進させた大阪市、ラジオ大阪他の関係者の皆様に深く感謝したい。

註

- (1) 大阪市(ゆとりとみどり振興局/北区役所)、(財)大阪市公園協会、(財)大阪21世紀協会、(社)関西経済連合会、西日本旅客鉄道(株)、関西電力(株)、松下電工(株)、京阪電気鉄道(株)、(株)日建設計、(株)カクタス、英国文化研究所、御堂筋まちづくりネットワーク、水都ルネサンス実行委員会、大阪芸術大学、計14団体で構成。なお、(学)塚本学院大阪芸術大学塚本邦彦理事長は副委員長を務められた。
- (2) 「OSAKA光のルネサンス」は、2004年12月1～26日、大阪市役所庁舎前・大阪府立中之島図書館・中之島バラ園など、中之島界隈を中心に催されたイベント全体の呼称であり、「ローズライトガーデンプロジェクト」は、その中における中之島バラ園一帯で大阪市、ラジオ大阪、大阪芸術大学の連携事業として展開されたものである。
なお来場者数は、OSAKA光のルネサンス/約810,000人(大阪市による実施報告書より引用)、ローズライトガーデンプロジェクト/約97,100人(ラジオ大阪による実施報告書より引用)である。
- (3) 大阪芸術大学中之島バラ園アートプロジェクトコミティースタッフ(21名) (2004年度時、順不同)
谷 悟 アートプロジェクト研究室
木近 功 芸術計画学科 三浦 麻香 舞台芸術学科

井上 宏人	芸術計画学科	金城 彰子	デザイン学科
松岡 愛子	芸術計画学科	坂田 貴広	写真学科
横田 裕子	芸術計画学科	田端 祐香	環境デザイン学科
岡部 洋子	美術学科	今川 里華	芸術計画学科
酒井 宏憲	芸術計画学科	黒木ヒロコ	芸術計画学科
酒田 真弓	美術学科	中島あゆみ	芸術計画学科
矢野 千尋	美術学科	渡辺 純子	芸術計画学科
森 悟司	芸術計画学科	帯包 怜子	デザイン学科
宮武 正知	芸術計画学科	水谷 文香	芸術計画学科

協力 (15名)

酒井 典子	芸術計画学科	高橋真理子	芸術計画学科
清水あゆみ	芸術計画学科	長野 洋樹	芸術計画学科
森 奈々恵	芸術計画学科	工藤 智美	芸術計画学科
塩田 恵介	芸術計画学科	大崎 祥子	芸術計画学科
星野 量	芸術計画学科	福井まどか	芸術計画学科
久保川和子	写真学科	桐畑 晴樹	芸術計画学科
木村 美樹	芸術計画学科	大屋 秀男	放送学科
浜田恵里加	芸術計画学科		

- (4) ダイアログマップは、バラを栽培する薔薇守（大阪市ゆとりとみどり振興局北部方面公園事務所中之島公園担当スタッフ）のコトバを縦に、この園に憩う市民のコトバを横に組み、余白に学生たちによるキーワードを配置するかたちでバラ園に対する“多様な想い”を存分に交差させることで、多角的にバラ園のリアリティを浮上させようと企てたものである。
- (5) 音は、スコップで土を入れ替える音、水撒きの音、雨音、コオロギの鳴き声、鋏でバラを剪定する音+バラを管理している人の声で構成し、左右交互に配置した5台のスピーカーから順々に聞こえるようにした。
- (6) 報道実績
 2004.12.16 「かんさいニューズ一番」NHKテレビ
 2004.12.18 「関西ラジオワイド」NHKラジオ
 2004.12.22 「KIPPO NEWS」*（第486号/日本語版、英語版、ホームページ版）関西国際広報センター
 * 「KIPPO NEWS」は関西のトピックスを各国の大使館、領事館及び海外メディアの特派員や外国経済団体&賛助会員に隔週で発信するメディアである。
 2004.12.24 「産経新聞」（朝刊）産経新聞社
 2004.12.24 「読売新聞」（朝刊）読売新聞社
 2004.12.24 「ラジオチャリティミュージックソン2004」ラジオ大阪
 本プロジェクトは“自己完結のイベントではない”、“自然との調和にこだわる”、“作り上げる過程もアートプロジェクト”など、その真意を適確に表現したコメントにより取り上げられた。
- (7) 谷 悟「冬の薔薇は休眠し、夢想へと誘う」（夢想する園—Rose Gardenへの誘い—リーフレット）大阪芸術大学中之島バラ園アートプロジェクト委員会 2004年所収で基本姿勢を表す言葉として記した。
- (8) 谷 悟「生きる術としてのアート」（「京都新聞」〈文化欄〉）京

都新聞社 2002年12月25日の中で、アートプロジェクトの特性をあらわすキーワードとして用いた。筆者により執筆された論文、豊原 正智・谷 悟「『アートプロジェクト』という名の回路—相互触発を生じさせるための構想と実践—」（大阪芸術大学〈芸術〉第25号）大阪芸術大学 2002年所収でも、この語はサブタイトルに用いた。